



奥西 晃先生を送る(奥西晃教授退職記念号)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 正木, 建治 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/2548

奥西 晃先生を送る

奥西先生は、前任校京都工芸繊維大学から大阪女子大学に赴任されて以来、29年の間英文学科・英語英米文学専攻の貴重な人材として、教育と研究に専念されてこられた。その間、学生部長として、大学行政の重責も担われている。2000年3月末で定年を迎えられ、本学を退職されることになった。世間の当然の約束事とは言いながら、送別する人間にもさまざまな感慨が去来する。先生とは10数年間共にイギリス文学の教育を担当してきた。その間、意見が異なり、激論を戦わすことも少なくなかった。これはほぼ同世代同士の気安さも手伝っていたかもしれないが、わたしにとっては、忘れ難い、懐かしい記憶になるだろう。

奥西先生は、いい意味での頑固一徹の人である。それは、研究態度にもよく表れている。ニーチェ、フロイト、フーコー、バルト、デリダ、ド・マンといった、欧米批評の流行ブランドを安易に作品研究に持ち込むことを徹底して避けられ、またそんな研究には厳しく対処されていた。ブランドの重い価値を十分に認識されてはいたが、作品の読みをおろそかにして、ブランドを借りて己の論文を飾り立てる軽薄な姿勢を戒められたのである。わたしも、「テキストをよく読みなさいよ」と言われたことを覚えているが、今もその言葉を有り難く肝に銘じている。

奥西先生は、D. H. ロレンスを中心に、18世紀、19世紀、20世紀のイギリス小説を研究対象とされてきた。E. M. フォースター、ヴァージニア・ウルフ、アイリス・マードックなどの作品研究も発表されている。他に、シェイクスピアについての論文も書かれているが、本領はやはり、作品の精緻な読みと、研究文献の誠実な渉猟に裏打ちされた、イギリス小説に関する業績であろう。論文の一つ一つは、その堅実重厚さのゆえに、上辺の華麗さはないにしても、いぶし銀のような深い光沢を放っている。ロレンス論にとりわけ優れたものが多く、わたしは特に、*Twilight in Italy* を扱った論文

が気に入っていた。それでも、「『自負と偏見』—結婚の倫理と心理と個性—」（内田毅監修 『イギリスの心理小説』 東海大学出版会 1985 年）が、もっとも先生の会心の作ではないかと推察している。「ジェイン・オースティンは倫理的な観点から普通の人間の心の真実を追求した心のリアリストであり、その手法は劇的な手法と心理的な手法を併用した新しい心のリアリズムというべきであろう」（同書、124 頁）は、卓見であると今も思っている。

ご退職後は、しばらく春の光と風の中で世俗の垢を洗い落とされ、ふたたびイギリス小説の世界を存分に散策されることだろう。

できれば、作品の優れた読み手のみが書くことができる、『イギリス小説入門』を近い将来に上梓して頂きたいと願っている。

正木建治